

2024/3/31

2024/04/23訂正

■部局横断型「死生学・応用倫理教育プログラム」2024年度開講科目

(授業形態や教室などは変更されることがあるので、必ず開講部局でご確認ください。)

○必修科目

1文学部 04240031 FLE-HU4201L1

堀江宗正ほか「死生学概論」(死生学の射程) 2単位 A1+A2 金 3

死生学に関連する研究をおこなっている文学部・人文社会系研究科の教員を中心に、死生学の主なトピックを取り上げて、現在の研究状況を概説する。それぞれ、人間の死と、死にゆく過程での生をめぐる諸問題、またそれらに関する思想や実践を取り上げる。死生に関する多様なアプローチを学び、学際的思考の基礎を養う。なお、本講義は「応用倫理概論」と共に、部局横断型プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の基幹講義である。

2文学部04240070 FLE-XX4204L1

鈴木晃仁「応用倫理概論」(応用倫理入門) 2単位 S1+S2 金 3

○選択必修科目

3文学部 04240061 FLE-XX4203S1

早川正祐「死生学演習 I」(病いの語りをめぐる倫理) 2単位 S1+S2 水 2

人間は、病いとともに生きていくことを余儀なくされたとき、これまで自明視していた人生の意味を深く問い直すようになる。このような意味の問い直しの過程で、当事者が語るということや他者がそれを聞き届けるということは、極めて重要な役割をもっている。しかしながら、ここで注意すべきは、病いの苦しみを語ることやそれを聞き届けることが、多くの場合、困難に満ちたものになるという点である。それゆえ、その困難さを念頭に置きつつ、病いをめぐる体験とその意味について考察することが求められる。

そこで本演習では、病いに関する物語論の古典であるアーサー・フランクの『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』=Arthur W. Frank, *The Wounded Storyteller: Body, illness, and Ethics*を講読する(訳本でも可)ことで、病いの語りがどのような複雑な意味と効果をもつのかをその社会的含意も含めて考えていく。より具体的には、病いの語りの三類型である回復の語り・混沌の語り・探究の語りがあるのか、また相互にどのような関係にあるのかを考察する。それと同時に、コミュニケーション・身体・脆さ(vulnerability)・傾聴・証言・苦しみ・多声性といった臨床倫理における重要概念が、どのように捉えられているのかを検討する。とりわけ、ポジティブな回復の語りをはらむネガティブな性格や、私たちの身体や生産性重視の社会がはらむ閉鎖的・排他的な側面等を批判的に見ていく。そのことを通して、従来の臨床倫理では見落とされている、病いの複雑な体験に根ざした倫理や責任のあり方、またコミュニケーションのあり方を根本的に考察する。

4文学部04240062 FLE-XX4203S3

鈴木晃仁「死生学演習 II」(患者の歴史と倫理 History and Ethics of Patients) 2単位  
S1+S2 火 4

患者の歴史と倫理に関する論文や一次資料を読んで議論する

Reading sources and studies on the history and ethics of patients and having a discussion

#### 5文学部04240063 FLE-XX4203S1

富澤かな「死生学演習Ⅲ」（墓石のグローバルヒストリー） 2単位 S1+S2 火 5

墓をめぐることは、さまざまな時代、地域、宗教文化のそれについて多くの研究がなされてきたが、それらの境界を越え、相互の連関と展開を問う研究はいまだ蓄積が浅い。本演習では、講師が研究しているオペリスク型墓石を焦点に、墓が示す慰霊のかたちと心性の展開をグローバルに追うことを試みる。それにより、宗教学、死生学、グローバルヒストリーの接点を探り、分野、時代、地域をまたぐ研究の方法をともに考える。

#### 6文学部04240081 FLE-XX4206S1

会田薫子「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法） 2単位 S1+S2 火 5

社会における事象の捉え方には大別すると量的研究法と質的研究法があり、医学、保健学、看護学、社会学、心理学、教育学等の分野においては特に数量的なアプローチが主流であったが、近年、個人およびグループ面接や観察によってデータを得る質的研究法の有用性が広く知られるようになり、この方法で研究に取り組もうとする研究者も増えてきた。しかし、手法・手続きが整えられ評価法も確立された量的研究法とは異なって、質的研究法を学ぶことは容易ではないと言われている。本科目では、質的研究法の入門編として、質的研究法の世界を概観し、質的研究法を用いた原著論文の詳細なクリティークを通して、質的研究法の特徴を理解し、研究法と論文作成法を具体的に把握し、また、事象の捉え方に関して視野を拡大することを目標とする。

#### 7文学部 04240082 FLE-XX4206S3

鈴木晃仁「応用倫理演習Ⅱ」（患者の歴史と倫理 History and Ethics of Patients） 2単位  
A1+A2 火4

歴史的に古代・中世から現在までの流れを理解議論することと、倫理的な視点で重要なポイントを理解し議論することが重要となる

Historical understanding and discussion about patients from the ancient and medieval periods to the present is one crucial point. An ethical approach is also essential on the same issue.

#### 8文学部 04240083 FLE-XX4206S1

堀江宗正「応用倫理演習Ⅲ」（環境思想研究） 2単位 A1+A2 月 3

環境思想に関わる文献を読み、議論を深める。

学部・人文社会系研究科の学生・院生が、自分自身の専門的研究を、環境という視点から捉え返すようになることを目標とする。

したがって、今は環境やエコロジーやサステナビリティに関心がないと思っている人も、積極的に参加して、視野を広げていってほしい。

#### 9文学部04240084 FLE-XX4206S1

井口高志「応用倫理演習Ⅳ」（支援とケアの社会学） 2単位 S1+S2 木 2

ケアや生きづらさなどに関連した研究領域においては、しばしば人々の語りや記憶、認識などが重要なデータとなります。それらは個人的で個別性が高いものという印象を受けますが、人々の間で共有されたり、社会に流通する知識や権力と関連しているという意味で、社会学的な対象です。今年度は、語りや記憶、認識や知識といったキーワードに関連した研究や、それらを捉える社会学の方法に関する文献を読んでいきたいと考えています。また、文献講読をしながら、各自の研究計画作成・発表等を通じて、問題意識から研究へとつなげていくことも試みます。教員の専門領域周辺（医療・福祉・障害・ケア・逸脱・家族・死生などの社会学）と関連する話題が多くなることが予想されますが、異なる関心を持つ人や他ディシプリンを学ぶ人の参加も歓迎します。

#### 10文学部04240085 FLE-XX4206S1

冨澤かな「応用倫理演習V」（オリエンタリズムと死生学——語りにくい他者を考える）2 単位 A1+A2 火5

近現代世界で「宗教」と「東洋」と「死」がどのように語られ（あるいは語られず）、どのように疎外（あるいは同化）されてきたか、そこに生じるさまざまな分断にどのように向き合うことができるかをテーマに、講読と議論を行う。

#### ○選択科目

#### 11文学部 04240041 FLE-XX4202L1

会田薫子「死生学特殊講義 I」（臨床死生学・倫理学の諸問題VII）2 単位 S1+S2 水 6

臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、実践家や研究者の発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」として一般に公開しており、医療・介護関係者が全国から多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実務家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

#### 12文学部 04240042 FLE-XX4202L1

会田薫子「死生学特殊講義 II」（臨床死生学・倫理学の諸問題VIII）2 単位 A1+A2 水 6

S学期に続き、臨床死生学および臨床倫理学の諸課題に関して、実践家や研究者の発表とそれに基づく討議を行う。本科目は「臨床死生学・倫理学研究会」（オンライン）として一般に公開しており、医療・介護関係者が全国から多数参加している。

授業運営についてメールで知らせるので、履修者・聴講者はメール・アドレスを予め担当教員に知らせること。

本研究会では、医療・介護現場の実務家や現場に臨む研究者の講演および思想系の研究者の講

演を軸に、現代社会における生と死をめぐる諸課題について理解し考察を深める。また、当該学問領域の理論的な進展も扱う。

なお、授業の運びに関して理解してから研究会に参加することが求められるので、履修希望者は初回のオリエンテーションに参加を要する。やむを得ない理由によってオリエンテーションに参加できない場合は、担当教員にメールにて問い合わせること。

A期は5回の研究会と翌週等にディスカッション授業を行う。研究会はZoomで行い、オリエンテーションとディスカッション授業は対面で実施する（Zoom参加も可）。ディスカッション授業では、履修者の小レポートの発表と参加者同士の対話を軸に進める。

2024年度A学期の予定は以下のとおり。

10月 2日 オリエンテーション

10月 9日 足立智孝先生（亀田医療大学看護学部 教授）「Medical Humanities から Health Humanitiesへー 歴史的背景と現代的展開を中心として」

10月16日 前回のテーマに関するディスカッション

10月23日 南須原康行先生（北海道大学病院 副院長、医療安全管理部 教授・部長）「医療安全と医療倫理ー 院内周知と教育」（仮）

10月30日 前回のテーマに関するディスカッション

11月 6日 錦織宏先生（名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学教育センター）「医学教育モデル・コア・カリキュラムにおける人文社会科学」

11月20日 前回のテーマに関するディスカッション

12月 4日 木下千春先生（京都民医連中央病院 副院長、腎循環器センター長）「チームで取り組む、末期腎不全をもつ超高齢者へのアプローチ」

12月11日 前回のテーマに関するディスカッション

12月18日 枝広あや子先生（東京都健康長寿医療センター研究所、歯科医師）「認知症の人の最期のときを支える口腔と食ー Comfort Feeding Onlyまで」（仮）

1月 8日 前回のテーマに関するディスカッション

### 13文学部 04240043 FLE-HU4202L1

会田薫子「死生学特殊講義 III」（臨床死生学特論） 2 単位 A1+A2 火 6

臨床死生学と生命倫理・臨床倫理が交差する領域における諸課題の理解と思考力を養うことをめざす。

予定トピック：臨床死生学の射程、生命倫理と医療倫理と臨床倫理の異同、医療とケアの多職種協働、意思決定支援とカンファレンスの方法、臨床死生学の諸課題をひとりひとりの患者/利用者の視点から臨床倫理的に検討（End-of-Life Careの諸問題、緩和ケアとその心理・社会・スピリチュアル面の諸問題、延命医療の差し控えおよび終了に関わる問題、「尊厳死」・安楽死・医師による自殺ほう助、脳死、臓器移植など）

### 14文学部 04240044 FLE-XX4202L1

早川正祐「死生学特殊講義 IV」（共感とケアの哲学） 2 単位 S1+S2 木 3

臨床や教育、また日常の至る場面において、ケアの重要性が盛んに指摘されている。にもかかわらず、その内実は十分には吟味されていない。こういった現状を踏まえ、現代倫理の鍵概念となった「ケア」について、その複雑さと困難さを尊重する仕方で、批判的に考察していきたい。

より具体的には、英語圏で1980年代以降に登場してきたケアの倫理 (Ethics of Care) においてケア、またそれらの概念と不可分な、ニーズ・応答責任 (responsibility) ・脆弱性 (vulnerability) ・依存性 (dependency) ・受容性 (receptivity) といった概念が、どのようなものとして捉えられてきたのかを検討する。とりわけ、ケアの倫理の代表的な論者であるキャロル・ギリガン、ネル・ノディングズ、エヴァ・キテイの議論を丁寧に見ていくことで、人間の傷つきやすさと依存性を根本に据えるケアの倫理が、主流の倫理学 (もちろん一枚岩ではないが) に対して、どのような独自の貢献をしようのかを考察したい。

#### 15文学部 04240045 FLE-XX4202L1

早川正祐「死生学特殊講義 V」(自律についての関係的なアプローチの展開——現代行為論・自由論の一展開) 2 単位 S1+S2 木 4

1990年代から2000年代にかけて英語圏で新たに登場してきた「関係的な自律論」(relational autonomy) について批判的に検討し、その臨床的応用も試みる。

従来の個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対して関係的な自律論は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目し、一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。講義では、関係的自律論において、従来の自律論の中心的諸概念、すなわち、自己決定・反省性・合理性・自己理解・統合性等がどう捉え直されているのか、またどう捉え直されるべきなのかを考察する。その上で、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的／文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的な意思決定プロセス (shared decision-making process) に相応しいものへと発展させる。

#### 16文学部 04240046 FLE-XX4202L1

早川正祐「死生学特殊講義 VI」(認識をめぐる不正義と責任——現代認識論の一展開) 2 単位 A1+A2 水 2

2010年代以降、英語圏の認識論で盛んに論じられるようになった「認識をめぐる不正義」(epistemic injustice) の問題と、その不正義を是正する「認識をめぐる責任」(epistemic responsibility) の問題を考察する。そのことを通じて、「認知する」や「認識する」といった営みに否応なく孕まれている倫理的な次元を、その社会的な含意も踏まえつつ、明らかにする。

哲学の分野においては、認識論と倫理学は別々の領域に属するものとししばしば——「常に」ではないが——見なされてきた。しかしながら、私たちの具体的な生活の場面を考えると、多くの場合、倫理の問題は同時に認識の問題でもある。例えば、疾病・障がい・性別・性的指向等による差別、またレイシズム等においては、認識自体が、力関係によって媒介され、相対的に弱い立場に置かれた者は発言権を奪われ、沈黙を余儀なくされることがある。また勇気をもって窮状を訴えたとしても、それは正当な証言としては見なされず軽視される

かもしれない（「証言をめぐる不正義」）。さらに言えば、そもそも、当事者の苦境にたいして、周囲の人々の関心が低いため、その苦境を表現する言葉が開発されず、その結果、本人はその苦境を訴える言葉自体を奪われているかもしれない（「解釈をめぐる不正義」）。本講義では、まず主にフェミニスト認識論（ないし社会的認識論）による「認識をめぐる不正義」論の基本的な発想・概念を概観・検討する。その際、臨床の文脈において、その基本的な発想・概念が、どう発展的に捉えられるのかにも触れたい。そのうえで、そういった不正義に対して私たちはどのような責任を負っているのかも批判的に考察する。また私自身の認識的不正義論の展開として、「証言をめぐるタイミング」（testimonial timing）という概念を導入することで、共感知、認識的徳／悪徳また認識的不正義をタイミングの観点から考察したい。

#### 17文学部 04240047 FLE-XX4202L1

乗立雄輝「死生学特殊講義 VII」（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察） 2単位 A1+A2 水4

死と生をめぐる諸問題に、偶然や確率という事象、概念、およびそれらにまつわる諸理論がどのような関わっているのか、もしくは、関わりうるのかを考察する。

各人にとって自身の生と死は一度きりの事象であり、いずれはみな死に至ることが確実と考えられるにもかかわらず、しかし、ある意味では、そうであるがゆえに、死と生をめぐる私たちの思考には、意識するか否かにかかわらず、確率や偶然（性）にまつわる思考が深く関わっている。また、人間は、不慮の偶発的事態に起因する不具合や不幸を避けようと長年にわたって努力を積み重ね、その結果、ある程度の成果を挙げてきたが、そのことの副産物として、逆に合理的な思考ができなくなってしまうたり、旧来の倫理規範や価値観がゆらぐ事態が現れつつある。

本講義では、生と死の問題について、偶然や確率をめぐる議論がどのようにかわるのかを、様々な哲学者たちの主張に注目しながら考察していくことを試みる。

#### 18文学部 04240048 FLE-XX4202L1

古荘真敬「死生学特殊講義 VIII」（死生をめぐる実存哲学の諸問題） 2単位 S1+S2 金5  
われわれが各自のかけがいのない「この身体」のもとに息づき、自身にとって一回的な生を他者たちと共に生き、年老いて、死んでいく、その多様な実存の様相と意味について、とりわけ「可能性」「現実性」「偶然性」といった様相概念に注目しながら、西洋哲学史上のさまざまなテキストを解釈し、考察を展開していく。扱われるテキストは、必ずしもいわゆる「実存哲学」に分類されるものとはかぎらないが、われわれの実存理解の精緻化をめざした解釈を試みていきたい。

#### 19文学部04240049 FLE-XX4202L1

山田慎也「死生学特殊講義IX」（葬送儀礼の変容と死生観） 2単位 A1+A2 水2

死に際して行われる葬送儀礼は、人々の死生観とも密接に関連しており、死生学においても重要な課題である。個人化の進む現代においては、葬送儀礼は大きく変容しており、現代の死を考える上でもその動態を含めて総合的に捉えていく必要がある。この講義では、おもに民俗学的な視点から、近現代の日本の葬送儀礼について取り上げていきたい。その際には必要に応じて近代以前の歴史の変遷や、また地域的な多様性についても含めて捉えていくことで、日本における死の文化について

検討していきたい。

#### 20文学部04240050 FLE-XX4202L1

冨澤かな「死生学特殊講義 X」（宗教・東洋・死を語る視座(1)）2 単位 S1+S2 月 2

「宗教」と「東洋」と「死」と、バラバラなテーマと見えるかもしれないが、ここに「オリエンタリズム」という要素を入れるとつながりが見えてくる。これらはみな、近現代において世界と日常から疎外されてきたものである。時にロマンティックなイメージもはらみつ、しかし社会の中心に置かれることなく、扱いの悪いものとして脇に置かれてきたものである。そしてこれらの疎外は個別に生じたわけではなく連動して展開してきた。本講義の前期は、カースト論に見られる人間・社会観と、サティール論に見られる女性と伝統と死の位置づけを大きなテーマに、宗教・東洋・死を語る視座を考える。

なお、本講義は「死生学特殊講義」であるとともに「宗教学宗教史学特殊講義」でもある。そのため、「死」に直結しない内容も含むことを理解の上、履修を検討すること。

#### 21文学部04240071 FLE-XX4205L1

轟孝夫「応用倫理特殊講義 I」（技術時代の倫理——ハイデガー哲学の視点から）2 単位  
A1+A2 月 4

本講義では、「存在への問い」で知られるドイツの哲学者マルティン・ハイデガーによる戦後の技術論を手引きとして、現代技術の本質とは何か、また現代技術によって規定された今日の社会において可能な「倫理」とはいかなるものかについて考察する。

講義ではまず、ハイデガーの「存在への問い」の基本的内容を『存在と時間』から後期に至るまでの時代的展開に即して概観する。その際、彼の哲学的思索がもつ政治性にとくに注目したい。

こうした「存在への問い」の概要の把握に立脚して、講義ではハイデガーが戦後に発表した論文「技術への問い」などの講読を行い、彼の技術論の倫理的・政治的含意を明らかにする。

以上のような内容を通して、本講義では現代の「応用倫理学」の本質と限界を浮き彫りにするとともに、今日のわれわれが技術に対していかなる態度を取るべきなのかを考察していきたい。

#### 22文学部04240072 FLE-XX4205L1

吉永明弘「応用倫理特殊講義 II」（都市の環境倫理（Urban Environmental Ethics））  
2 単位 S1+S2 月 4

環境倫理学の基本的な枠組みを知るとともに、「都市の環境倫理」の内容を理解することによって、環境問題と都市問題について倫理学の視点から考えることができるようになる。

#### 23文学部04240073 FLE-XX4205L1

福永真弓「応用倫理特殊講義 III」（ポスト人新世時代における自然らしさとは何か、人間的であることとは何かを食と場所に関する議論を通じて考察する。）2 単位 A1+A2 火 4  
食とは、自然が生み出したものを人間の身体に取り入れる行為であり、身体という場は人

と自然が関わる場でもある。また食は、食料を得て加工し食卓に並べるまでの過程も、食べるという行為自体も、きわめて文化的かつ社会的行為である。しかも、グローバルに広がる食の生産・消費・廃棄のシステムに支えられた現代の食において、わたしたちは見知らぬ他者が生きる場と生産・消費・廃棄のシステムを介してつながっている。本講義では、大気海洋システムまでも大きく人間活動に影響を受け、人為起源の生物系群に地球が覆われた人新世時代において、食システムがいかなる変容を求められ、実際に変容しつつあるかを追いかける。そして、よい食とは何かについて、おいしい、健康である、倫理的である、持続可能である、公正である、真正である、など「よさ」を表現する概念と実践をたどりながら考える。それは同時にわたしたちが生きる場所とは何かについて考えることでもある。本講義は二つの目標を設定する。一つは、現在の食システムを理解した上で、よい食とは何かを評価する軸をみずから見だし、実践する方法を探求することができることである。もう一つは、人新世時代において自然らしさ、人間的であるとは何かについて深く考察し、具体的な社会のデザインについて想像する力を得ることである。

#### 24文学部04240074 FLE-XX4205L1

村上靖彦「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究入門） 2単位 S2 集中  
現象学的な質的研究は、個別事象の運動を内側から分析するのに適した方法論である。その方法論の概要と事例を示して習熟することを目的とする。

#### 25文学部04240075 FLE-XX4205L1

北條勝貴「応用倫理特殊講義Ⅴ」（環境文化史から実践するパブリック・ヒストリー） 2単位 S1+S2 月5

近年、歴史学の各分野で、歴史研究・歴史叙述を専門家の独占から解放し、一般社会のひとびととともに考えてゆくパブリック・ヒストリーが盛んになっている。そこでは、史料を読解し過去の事実を云々するだけでなく、わたしたちが直面しているさまざまな現代的問題について、歴史的な知見を援用し解決の方法が模索されている。例えば、災害史の知識は、防災・減災のリスク管理に役立ってくれるのか。伝統や文化財の保全と環境の改変・開発とは、どのように折り合いをつけてゆくべきなのか…。しかし、それらをめぐる合意形成の現場では、負の歴史をめぐる地域住民の悪感情の調整、“Shared Authority”をめぐる葛藤など、さまざまな固有のアポリアが横たわっていて、容易な解決を許さない。同授業の担当教員：北條は、2021年度の死生学・応用倫理研究センター開講科目「〈亡所〉の環境史／倫理学」にて、理不尽に抑圧・忘却されてゆく場所／人びとを〈亡所〉と定義、上記と同質の問題意識からケース・スタディを行った。本授業もそれを踏襲し、北條の関わってきた〈亡所〉の諸問題を検討しつつ、社会生活における〈歴史の応用〉について考えてゆきたい。

また、受講生にはこの授業を通し、以下の目標に到達してほしい。

- 1) 高校までの教科書で学んだ歴史が、唯一普遍ではなく仮説に過ぎないことを自覚できるようにする。
- 2) 一国史・人間の歴史という固定的な枠組みを相対化し、より柔軟で多角的な歴史への眼差しを持てるようにする。
- 3) 過去を学ぶことが現在を生きるうえでどのような意味を持つのか、主体的に考えられるように



する。

26文学部 04240076 FLE-XX4205L1

鈴木晃仁「応用倫理特殊講義 VI」(医療者の歴史と倫理 History and Ethics of Medical Practitioners) 2単位 A1+A2 金4

古代・中世から現在までの医療者(医師や看護師など)の歴史と倫理を講義する

The history and ethics of medical practitioners from the ancient and medieval periods are lectured.

27文学部04240077 FLE-XX4205L1

福嶋揚「応用倫理特殊講義 VII」(破局のなかの希望 - 人新世の倫理・経済・宗教) 2単位 A1+A2 水2

今日のグローバル化した世界は、三重のカタストロフィに直面している。それは、第一に気候変動に象徴される地球生態系の崩壊、第二に貧困の拡大(貧富格差の極大化)、第三に世界規模の戦争である。

これらの混沌として複合的な事象の奥底を探っていくと、あくなき経済成長と軍事力の拡大を求めてやまない国民国家同士の覇権争いという根本的原因が見えてくる。この資本・国民・国家というシステムは19世紀に確立されたものだが、それが今や限界に達しつつあるのだ。あるいはこのシステムを「軍産複合体」と言いかえてもよい。この複合体の原型は、実は遠い古代世界に現われた諸帝国においてすでに見出される。そして、そのような古代帝国の暴力的な支配に対する一種の対抗運動、いわば人間性の革命として、世界各地—中国、インド、中近東、ギリシャ—に現われたのが、今日にまで続く伝統的な宗教思想だった。哲学者ヤスパースはそれを「枢軸時代」と名づけた。

けれども宗教は、その後に国教化して帝国宗教となると、もはや対抗運動ではなくなってしまう。とりわけ近代以降、北大西洋地域のキリスト教文明は、果てしない経済成長と覇権争いによって、生態系破壊に象徴される地球規模の危機の原因となった。西欧キリスト教文明は、今まさにそのようなグローバルサウスからの告発に直面している。

経済、宗教、道徳がからまりあった危機に直面する現代において、それらの垣根を超えるような大きな視座が必要となる。とりわけ軍事力とも金(マネー)の力とも異なった理念と実践こそが必要不可欠となる。そればかりか、既存の社会システムの崩壊、すなわち経済成長を続ける国民国家というシステムの終焉を予期しつつ、その先に地球生態系が共に生き延びる希望を描くという、きわめて困難な課題が待ち受けている。

この講義では、倫理学とキリスト教の研究者の視点から、以上のような複合的で越境的な問題にとりくむことにしたい。

28文学部 04240078 FLE-XX4205L1

堀江宗正「応用倫理特殊講義 VIII」(サステナビリティ研究) 2単位 S1+S2 金2

サステナビリティに関わる知識・用語を文理横断的に紹介すると同時に、最終的には人文知の枠組から批判的に研究する態度を養う。

サステナビリティ概念、サステナビリティ正義論、サステナビリティ思想、サステイナ

ビリティ経済学、サステナビリティ政治学に分けて論じてゆく。それを通じて、サステナビリティに関わる重要概念についての知識と概念批判の態度を身につけることを目的とする。

#### 29教育学部 09241104 FED-BT3101L1

大塚類「教育臨床学概説」(具体事例に基づき臨床現象学を学ぶClinical phenomenology based on specific cases) 2単位 S1+S2 木5

臨床現象学では、私たちが日常生活において体験するさまざまな出来事を「事例」として、現象学や哲学の観点から考察することを試みます。事例に基づく質的研究の一種だと言えるでしょう。本講義では毎回、若者・家族・教育にまつわる個別具体的な事例を取り上げます。講義者が体験したり見聞きしたりした出来事だけではなく、マンガ、エッセイなども事例として取り上げる予定です(参考資料参照)。人間の普遍的な経験構造を明らかにしようとする学問である現象学には、「個別は普遍に通じる」という言葉があります。個別具体的な事例を深く考察できれば、「私にも思い当たる節がある」、「そういうこともありうるかもしれない」という形で、普遍的な人間理解へと繋がられるはずです。受講者のみなさんが、自分事として当事者性をもって臨めるような身近なトピックを、深く考察することを通して、みなさんの物事を見る観点や、自己/他者理解が深まることを目指します。

#### 30医学部 02246 FME-IH3e21L1

池田真理「家族と健康」 2単位 A1 月1月2

時代の変化とともに家族形態は変化し、さまざまな状況・諸問題に応じた援助が家族に必要となっている。さまざまな健康レベルの家族のヘルスニーズや、家族の健康問題によって発生する家族問題を理解し、本来の家族機能を高め、意思を尊重し、健康増進に向かうよう、家族看護の展開を理解する。

##### **【到達目標】**

- 1.さまざまな家族の健康問題によって発生する家族の課題と家族看護の必要性、意義について理解できる。
- 2.家族看護の基盤となる家族を捉える諸理論(家族発達理論・家族システム理論・家族ストレス対処理論、他)と、その実践への活用方法を理解できる。
- 3.家族看護の諸理論を説明できる。家族を単位としたアセスメントの方法を理解できる。
- 4.家族看護の展開方法としての家族看護過程を理解できる。
- 5.家族の発達段階に応じた健康問題を説明し、家族に対する援助の方向性を説明できる。

#### 31医学部 02218 FME-IH2d03L1

瀧本禎之、中澤栄輔「生命・医療倫理 I」 2単位 A2 金1金2

本講義では、保健・医療の分野においてしばしば生じる意思決定が困難な問題を、主に倫理的側面から検討する。授業では、医療倫理学の基礎理論を講義するだけでなく、具体的なケースを用いたディスカッションも行うため、受講者の積極的な参加が望まれる。

本講義は、将来に保健医療や医療政策に携わる人にとって有益であるのはもちろんだが、それ以外の人にとっても、いろいろな立場の人との議論を通じて、自分の倫理的思考を見つめ直すよ

い機会となる。

32農学部 060500031 FAG-CC3C04L1

根本圭介「技術倫理」1単位 A2 月5

33農学部 060500021 FAG-CC3C03L1

芳賀猛「生命倫理」1単位 S1 月5

我々は皆、他の「命」をいただいて、生かされている存在である。人間社会の利益、科学技術の進歩、ヒトとヒト以外の生き物との間での命の価値の違いなど様々な理由で、ヒトや動物の命の扱い方が異なっている。本講義では、人の生命や死に関わる倫理上の問題だけでなく、生物資源問題、動物倫理、ヒトと動物の絆、食品安全、家畜防疫、感染症など、「食」に関わるさまざまな「生命」との関わり方を取り上げる。それらを様々な角度から実例をもとに聴講し、農における生命倫理として、多層な生命をどう秩序立てて理解し、どのように人類の幸福を追究すればよいかを、自身の専門分野とは異なる

立場からの情報も取り入れて、これまでとは違う発想、価値観、文化、思想などについて考える機会とする。

34教養学部 08F1303 FAS-FA4D03L1

小松美彦「科学技術リテラシー論Ⅰ」（日本におけるらい病（ハンセン病）対策の歴史——隔離、科学／非科学、生権力）2単位 S1+S2 金4 オンラインのみ

日本における古代から現代までの、特に明治期から昭和期にかけての、らい病（ハンセン病）の対策の歴史を検討する。

らい病（ハンセン病）がいかなる疾病と認識され、なぜ、いかなる対策が講じられたのか、その際、具体的にどのような議論が科学的／非科学的になされたのかを学ぶ。そして、それらは全体として生権力の観点からいかに捉えられるのかを考察する。

視点を転ずると、以上は、疾病をめぐる科学コミュニケーション論の問題のひとつにほかならない。この問題を歴史的に検討することもまた、本講の目的となる。

35教養学部 08D1002 FAS-DA4B02L1

石原孝二「応用倫理学概論[科学技術論コース]」2単位 A1+A2 未定

36教養学部 08F1003 FAS-FA4A03L1

石原孝二「応用倫理学概論[グローバル・エシックス]」2単位 A1+A2 未定

37教養学部 08C130101 FAS-CA4E01L1

斎藤幸平「現代哲学（1）」（ポスト資本主義の未来）2単位 S1+S2 木2

資本主義が行き詰まりをみせるなかで、ポスト資本主義を構想する必要性が高まっている。そこで、本授業では、マルクスの時代から現代にいたるまでのさまざまな資本主義へのオルタナティブを検討していく。

38法学部 0124978 FLA-PL4510L1

米村滋人「特別講義 医事法」（医事法）2単位 A1+A2 月2

医事法は、医療に関するさまざまな法律問題に加え、胚、死体、ヒト由来組織・臓器の法的地位、医薬品・医療機器の規制、さらには種々の医学・生命科学研究の法規制の問題など、きわめて広い範囲にわたる問題を扱う法領域である。これらの問題の検討には、民刑事法・行政法などの一般的知識を前提に、医療実務、法律実務、さらに医療政策や生命倫理なども考慮した複合的な問題解決能力が必要となる。本講義では、一般的な医事法の解釈問題につき解説を行うのみならず、医療・医学研究の実態や近時の動向を盛り込みつつ、現実に発生している法的問題を扱うことで、民刑事法・行政法を応用しつつ医療を中心とする実務的問題の解決を導く能力を涵養するとともに、医療のあり方や法の役割についての理解を深めることを目的とする。

以上